

CIEC 第 115 回研究会

テーマ：AI×教育が創る新しい学びの空間

～コグニティブ・サービスの応用と学習分析ツールとしての機械学習の活用～

開催日：2018年6月10日 13:00～15:30

会場：日本マイクロソフト 品川グランドセントラルタワー31F 会議室

講演：中田寿穂氏(日本マイクロソフト)

司会：高瀬敏樹(CIEC 小中高部会・札幌市立旭丘高校)

記録：平田義隆(CIEC 小中高部会・京都女子中学校・高等学校)

6月に入り梅雨時期で足元の悪い中、約30名という多くの参加者のもと、第115回研究会が行われた。

まず、日本マイクロソフトの中田寿穂氏より、ご講演をいただいた。

前半は、2000年代に入りAIの研究も進んだ昨今における、人工知能とその社会における役割について、日本マイクロソフトとAIとの関わりを中心に講演が進められた。日本マイクロソフトでは未来を描く「フューチャービジョン」を示されており、講演で拝見した2009年に示されたものでは、現在すでに実用化されているテクノロジーも多く含まれている。例えば、パワーポイントスライドの翻訳機能や、リアルタイムに話している言葉の字幕化などについて、AIが活用されている事例を具体的に説明された。また近年複合現実(Mixed Reality)というテクノロジーも進化し、これまでできなかったことが普通にできるようになってきていることを話された。

後半では、そのようなテクノロジーと教育との関係についてフォーカスされた。特に教育のイノベーションを支えるテクノロジーの中の適応学習について話は進んだ。この分野ではリクルート(株)が先進的であるようで、学習データを活用した新しい価値の創造に関する研究が行われている。例えば、スタディーサプリという学習サービスでは、従来の積み上げ型学習でつまずきが生じている生徒たちに対して、そのつまずきをなくす学習プロセスを解明し、ネットワーク型カリキュラムとして学習させるシステムにAIを用いて実用化している。これはパーソナライズド・ラーニングの中でも1つのゴールに向けた効率的な学習の部分ではなく、多様なゴールに向けた個別最適化学習の部分においてAIが活用されている例である。日本マイクロソフトでは今後に向けてチャットボットなどさらなる研究を進め実用化を目指していきたいと考えておられるようだ。

講演後、質疑応答を含め、フロアとのディスカッションの時間が設けられた。フロアからの発言は、講演内で出されたテクノロジーに関わる技術的な側面についての質問が多く出され、AIの活用がいかに注目されているかが伺えた。

AIにおけるテクノロジーは日進月歩で凄まじい進歩を遂げている。そのテクノロジーを教育という視点で活用していくことは今後不可欠である。今回の講演が参加者の皆様にとって、今後の教育活動における良い刺激となれば幸いである。

